



2019 (令和元)年10月1日 (火)

藤 棚

第373号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

動物愛護の思想的限界

校長 小川義男

豚の飼育は、食用としてばかりでなく、輸出産業としても重要な分野である。それが「トンコレラ」に冒され、莫大な数を「殺処分」しなければならないという。畜産業の危機も大変だが、豚も可哀想だ。豚が、どんなに可愛らしい生き物かは、今の中高生は知らないかもしれない。

「トンコレラ」の原因は、野生の猪だそうである。やむを得ずワクチンをうつそうだが、それは、国際社会での不安を呼び、豚肉輸出にマイナスの影響を生むそうである。

私は、信濃大町に、小さな山小屋を持っているが、至近距離でカモシカに遭遇したことがある。秋が深まると、冬眠のため、肥らなければならない熊がゴミ箱を漁りにくる。玄関前に 50 匹ほどの猿が屯していることは、珍しくない。別荘地だから、文句も言えないが、札幌の熊は、市街地に現れ、店に入り込んだりしたのだから、事は深刻である。

少し昔は、捕獲して、山奥に放したりした。今回は射殺したそうである。

鹿は可愛らしいが、木の皮を齧り、森を害する事、甚だしい。可愛い、などとは言っていない。鹿は、食っても旨いから、射殺して、食用に供すれば良いのだが、狩人が少ない。狩猟免許を取り、山中で、射殺した鹿を、皮を剥ぎ、肉を持ち帰る女性もいるそうである。「鹿女」と言うが、いかんせん鹿女の数が少ない。結局鹿は、山林や農村を、荒らし放題である。

国に野生動物に対処する、明確な姿勢を保って欲しいが、人手不足の上に、「動物愛護の思想」に対する気兼ねもある。

猪は「トンコレラ」を感染させ、豚にも、養豚業者にも、国家にも、莫大な損害や迷惑をもたらす。

日光の猿の横暴は、凄まじいものであった。猿は必ず数十匹から百匹で行動する。餌をやらねば、野生の猿の毛並みの美しさを保つのだが、ひとたび餌を与えると、行動が一挙に変化する。

いろは坂のあたりで、可愛いからと車を止めたら、何匹かが、ボンネットや屋根の上に上り、えさをねだる。ボンネットに、「電動」アンテナが備え付けられていた時代だが、アンテナを上下させても、小猿が、片手で掴まって遊ぶという事もあった。

日光市街の商店の被害は、凄まじいものであった。「猿君たち」は、平気で商品を持ち去る。犬を繋いでも、猿君達は、綱の長さすれすれのところまで近づき、悠々と商品を持ち去るという実状であった。

いろは坂には、野生馬も現れた。馬は可愛い。私は車を止めて窓を開けたところ、馬君は窓から、長手首を突っ込んで来て餌をねだり、閉口したことがある。

志賀高原でのスキー教室で、ホテルにも夜間、猿が侵入する危険があった。「必ず窓を閉めろ」「翌朝、隣の布団を確かめろ。隣に寝ているのは人間でないかも知れんぞ。」と私は生徒を驚かせたものだが、日本全体が、野生動物に舐められていたのかも知れない。農園を荒らし回る獣について、「彼らにも生きる権利がある。食べるのに任せ、その損害は、国が負担すれば良い」という珍論さえあった。私は、「人間も、その保護せねばならぬ動物なんだがなあ」と苦笑したものである。

北海道へ、スキーに行ったとき、二匹のキタキツネに会った。与える餌がない。翌朝、餌を用意して、食べさせる相談をしていたとき、ロープウェイの会社の社長らしい人に叱られた。「キタキツネは、肝臓をどろどろに溶かす病原菌を持っている。これに冒されたら、治療できる医師は、道内に数人しかいない。キタキツネと人間は、絶対に共存できないのです」と叱られた。

人間が、動物の生活領域に入り込んできているのだから、農園を荒らされたり、熊や猪、それに鹿の被害に遭うことがあってもしかたないのだという意見がある。興味深い見解だとは思ふ。

しかし、昔は、大自然の領域そのものが、熊や狼、蛇、猪などの生活領域そのものであった。力のない人間は、その中で、彼ら野生動物の危険に怯えながら、木の上などに眠り、細々と、その存在を守り続けていたのである。

人は、その優れた知能によって火を発明し、集団で野生猛獣と戦うことを覚え、莫大な時間を掛けて文明を形成するに至ったのである。

北海道の開拓当時、熊より恐ろしいのは蝦夷狼であったかも知れない。蝦夷狼は 40 匹程度の集団になって農家、農場を襲う。一度で家畜すべてを失った牧場もあるそうだ。樋口大尉、私は、そう記憶しているが、襲ってきた狼を軽機関銃の一斉射撃で全滅させたそうである。今日、北海道に蝦夷狼はいないが、もしいたら、その恐ろしさは熊の比ではない。若しかすると、道内での登山は行いにくくなっていたかも知れない。

「動物愛護」を唱えながら牛肉を食うのが人間の悲しさである。豚も羊も、とても旨いが、彼らは、一歳の頃に食用に供されるのだそうである。

外国の人が、鯨鯨に反対するが、鯨は、莫大な量の小魚を食う。小魚等の資源保存のためにも一定量の鯨鯨は必要であるとも聞く。

観念的動物愛護論ではなく、自然、動物、人間の共存とは、人間社会を守りつつ自然を大切にするとする事でなければならないのだが、このあたりは、生徒諸君にも、考えて貰いたい。

アマゾン川流域は、世界最大の森林だが、これが滅びるとき、温暖化どころか、地上の酸素量そのものさえ不足するに至る危険があると私は思う。

最近若い人たちの中に、温暖化を防ぐための活動が活発である。私などは、ともすればのんきになるが、緑の保全ということは、人類の存亡に関わる大問題である。

鹿は、まことに可愛いですが、木の皮を齧って樹木を駄目にする事がある。彼らから森を奪わないためにも、適度な数に保つことが必要なのである。自然と人間、これを深く考えて見よう。